なかゆくい（中休み）

富士栄登美子
（琉球大学教育学部教授）

2006.2

一、男の上に女をつくらず、男の下に女をつくらず

家政とは、家の政治である。かつて、家の中に大蔵大臣がいて、労働大臣がいて、厚生大臣もいた。『家族からはじまる小さなデモクラシー』。これは、一九九四年国際家族年の標語である。原語では、"Building the Smallest Democracy at the Heart of Society"であるが、この和訳が私は好き。

非常勤で家庭科の教員をしていた頃、夫から「同じだけ言いたければ、俺と同じだけ稼いでこい」と言われた。経済力は、発言力までも左右するのだということを思い知る。経済力なくしては小さなデモクラシーも生まれない。

家庭科教育の目標に「男女が協力して」とあるのは、こと家事労働だけの協力を意味するものではない。男も女も経済的に自立し、生活するのに必要なお金を同額出し合ったひとつのお財布で生活する。残ったお金はその人のもの。ちなみに、無償の労働（unpaid work）を経済企画庁の試算でみると、専業主婦で、一人当たり年間平均三〇四万円で、共働き女性の場合は、一九九万円である。結婚している男性のそれは、三六万から六八万円であった。

高校家庭科男女共通履修になって学んだ第一号が今二十五歳になっている。男女平等に違和感のない同年代を知り、家庭科教育の成果を肌で感じていた。そんな時、東京のあるスーパーマーケットで買い物をしていたら、二十五歳よりは若いと見受けるカップルが大きな声で言い合っていた。「外で仕事してきた俺が、何で夕めしをつくらなきゃならないんだよ」。えっ！足を止めた。二人とも外で仕事をして帰って来たのなら、一緒につくろうよということになるのが人情というものだ。でも彼の言葉には別の意味で共感を持った。「女性が家事をすることは当たり前」と育った私は、彼の言葉を女性の私の言葉として、一度は言ってみたかった。

二、教育の基本は「愛」

金曜日に締め切りの仕事をやりあげようと、その週は毎晩十二時過ぎの帰宅だった。提出し終えてやっぱりダウン。こ

れまでなら、土日は一歩も外に出ず、寝ていれば治った。しかし、今回はいつもと違う。疲労からくるストレスによる鬱状態で、いわゆる更年期障害らしきものに近いものだった。

人と話したくない。「頑張って」「諦めないで」「元気出して」などと言われても、「いいわよね、あなたは元気で」としか思えない。また、「大丈夫」「大変ね」も何の役にも立たない。もちろん、普通の状態の人になら使っても構わない。

では、このような状態に陥っている人にどんな言葉がけをしたらいいのだろうか。「おはよう」「ありがとう」「お疲れさま」「行ってらっしゃい」などの日常の挨拶言葉なのだ。頑張るとか、諦めないとか、元気出すとかは、こちら側の心や意志の問題だからだ。

心の中に入り込まない、さらっとした挨拶こそが嬉しかった。下を向いて肩を落として歩いていても、遠くから、しかも後から「富士栄先生！お疲れさまー」などと声をかけられると、思わずハッとする。

さらに、何よりも自分が「愛されている」と直感した時、頭の中の回路が瞬間的にガチャンと音をたてて切り替わったように感じた。この時、教育の基本は「愛」なんだと実感することができた。

また、もうひとつ救われたことは、私だけではないと感じた時である。結局三軒の病院を梯子したが、二軒目の女医さんから「私も同じようなことありますよ」の一言、琉舞の仲間の一人から「今、全く同じ状態なの」と知らされた時、私の心は救われた。

三、紙一枚の重さ

沖縄に暮らして、沖縄文化に触れもせでと、今私は琉舞に加えて三線（サンシン）の稽古をしている。かつて附属小学校長だった三線の師匠から次のことを伺った。校長講話の時、体育館の壇上に紙を一〆持ってきた。一学年児に紙一枚を持たせて、重いかと聞く。児童は、ウウンと頭を横に振る。一〇〇枚持たせて重いかと聞く。ウン少し重い。一〆（五〇〇枚）持たせようとしたら、一学年児ではもはや持てる重さではない。一枚の重さは軽くても、続ければ重くなるんだよとの教えである。

毎日毎日の稽古が力になるという。納得である。それ以来、私は出勤前の十五分間稽古をするようになった。

四、魅力ある授業の十箇条

日韓共同研究をすすめる上で、ハングルを学ぶ必要があった。ラジオで勉強していたが、大学のハングル講座を受講させていただくことができた。講師は、アメリカに実家があり、沖縄県の人をパートナーに持つ韓国美人（四十代後半）である。彼女からハングルだけでなく多くのことを学んだ。私として週に五コマの授業をしながらの受講は苦しい。しかし、ど

んなに疲れていても、遅刻してでも出席したいと思うのは何故なのだろう。ハングル講座を受講して、魅力ある授業の十箇条をあげてみたい。

1、まず、教室への入り方が違う。「アンニョンハセヨ！」（こんにちわ！）と明るい先生の声と顔が飛び込んでくる。

2、語学であるにもかかわらず、五〇人近い学生がいる人気講座である。それだけの学生の名前を瞬時に覚えてしまっている。

3、映画、ミュージック、ビディオ、パソコンなどの視聴覚機器を使いこなし、学生たちのモティベーションを高めている。

4、飽きさせない、なるほどなるほどとわかる授業を展開している。

5、左から右へ黒板を一〇〇％使っている。

6、授業の準備が充分なされていて、予習や復習になるプリントを配布している。

7、こまめに小テストをして採点し、次回には返している。

8、何より学生たちを愛していることが伝わってくる。

9、情熱をもって教えている。

10、服装も装飾の少ない（髪飾りとピアスだけの）シンプルなセンスで着こなしている。

彼女と知り合って友情が生まれた。時々韓国料理を一緒に食べに行く。彼女は、異文化とは言わない。外国文化なのである。異文化と言うと、のっけから私とあなたは異なっているのねとラインを引いてしまっている。外国文化の方が相手を認め合うことから始まるようで感じがいい。『学ぶことは、最もぜいたくな遊びである』（小椋佳）。今、私は最もぜいたくな遊びをしているのかもしれない。

五、地中海よりも美しい海

教育学部では、夏にユースクロスロードと称して合宿研修を実施している。小学校教員になるためには、テントを張れなければならない、泳ぐこともできなければならない。赴任した当初の二年間、この合宿に関わったことがある。渡嘉敷（離島）で、学生たちに二キロの遠泳を課している。だから全員がこの時期までに泳げるようになっていなければならない。体育科の学生がアルバイトで参加者一名に一人付く。私はボートに乗った。「エーンヤコラ」と学部長が掛け声をかけると、学生たちが泳ぎながら「エーンヤコラ」と返してくる。ここには競争はない。すべての学生に確かな力がつくのである。

一緒にボートに乗っていた教官から「さながら地中海にいるみたいでしょ」と言われた。地中海を見たこともない私は返事に困ったが、何と返事をしたかよく覚えていない。それ以来ずーっと私は、地中海を見てみたいと思っていた。今回、

国際服飾学会主催の研修旅行に参加し、地中海の十字路といわれるシチリア島へ行った。そこで私は「日本には、地中海よりも美しい海がある」ことを知った。

六、入学試験よりも卒業試験を

「わかるまで教えること、これは教育者の責任です」と十年程前、ドイツのある小学校へ教育視察に行った時に言われた。通常は保護者の授業参観も実施していないが、日本から来た特別な客とあって、授業を参観することが許された。英語の授業だった。明らかに異年齢の子供たちがいる。何故なのかと質問した。留年である。小学校から留年がある。「わかるまで教えること」が教育の責任であるとする考え方である。日本のようにわからないまま進級させたり、卒業させたりはしない。塾なるものはひとつもない。幼稚園から大学を終了するまで学費は税金で賄われているからゼロである。この税金も、日本での塾や予備校へ払う費用よりは少ないであろう。卒業試験さえ通っていれば行きたい大学へ行ける、聞きたい講義を受講することができる。大学の講義を受けるのに必要な基礎学力がついているからである。

私が小学生だった頃、塾に行っていることを担任の先生には隠していた。何故なら、「わからないところは、私が教えます」との自負を先生が持っていらしたからだ。

センター入試などは、じっくり考えていたら駄目。子供たちは、わからない問題を聞く時、答えを早く要求する。それに関わる枝葉のことを話し出すと、もういいってストップがかかっちゃう。時間がないのだ。

すべての子供たちに確かな学力をつけたいと思う。頭の良し悪しではなく、わかるまでに要する時間の長短なのである。子供たちは、時間がかかってもわかるようになりたいと願っている。人生八十年の時代になって、焦る必要はどこにもない。教師も、わかるまで教えるのだとの気構えを持ち、子供たちから決して逃げてはいけない。

入学後数か月で忘れてしまうような受験勉強や入試のための訓練は、果たして何なのだろう。受験勉強は、自分だけわかればいい、教えたら損だ、教えたんだから何かくれ等のように、子供たちの人格を歪めている。進級・卒業試験なら、わからない子に教えてあげようとする人間らしい心、共に育ち合おうとする心が育まれるはずである。

七、センス・オブ・ライフ

家政教育での感性とは、生活のセンスである。人間らしい生活の在り方、生き方にもセンスが必要である。家庭科教育とは、人間らしい生き方を教えながら、生活のセンスを育むことである。教育は、生活から離れてはならない。

道を歩きながら食べている人、地べたに座り込んで何かを食べている人は、果たして「いただきます」と言うだろうか。

私とても、どうしても疲れて帰ってきて、何も食べるものがない時、非常用のインスタント食品にお湯をかけて一人すする。これが人間らしい食事なのかと惨めだった。

末の子の私を成人させ、今の私の年齢（五十五歳）で母は他界した。明治に近い大正二年生まれの母は、男尊女卑の時代に生きた。平和憲法がしかれ「これからは男女同権の時代になるよ」と嬉しそうに話していたことを、まだ小さかった私はよく覚えている。人間らしい死に方をしたいと思う。ならば、人間らしい生き方をしなければ。お金で買えるものはもういらない。これからは、お金で買えないものを多く持ちたいものである。